



夏目漱石の病歴と生活（一）

広島文化学園大学大学院看護学研究科
森下恭光

■ 緒言

夏目漱石（本名、夏目金之助）は、1867年2月（新暦に換算）に誕生し、1916年12月に死去している。満年齢でいえば49歳の一生であった。当時としてはとくに短命ではないが、長命でもなかった。体格的には本人が1889年に残したメモによれば、身長が約160センチ、体重は約50キロであったから標準か、それ以上といえるであろう。

しかし、夏目の健康面について見ると、健康に恵まれた一生であったとは言い難い。とくに消化器系については早い時期より問題を抱えていたし、神経系についても悩まされることが多かった。本論では、これらの健康面で抱える問題が夏目自身の生活やその周辺にどのような影響を及ぼしたかを可能な限り事実に基づき明らかにすることを試みたい。なお、この課題は本論だけでは終了しないので、継続研究を予定している。

■ 解剖所見に見る夏目漱石の病歴

大正五年（1916年）12月9日、午後6時45分に永眠した夏目漱石（本名夏目金之助）の遺体は、遺族（妻夏目鏡子）の発案で、主治医である真鍋嘉一郎¹⁾に解剖に付してほしいとの申し出がなされた。これを受けて、夏目の遺体は、真鍋の勤務校でもある東京帝国大学医科大学病理解剖室で翌日の12月10日、午後1時40分から行われることになった。

立会人としては、妻鏡子の代理として弟中根倫（注、鏡子の旧姓は中根）、夏目の兄直矩²⁾の長男小一郎、門下生の総代として小宮豊隆³⁾、真鍋嘉一郎等が解剖に立ち会うことが決定される。解剖の執刀は長与又郎⁴⁾（注、東京帝国大学医科大学病理解剖学第二講座担当）が行った。

以下は、解剖が行われた一週間後（12月16日）に、夏目漱石氏剖検（標本供覧）と題して、長与又郎が行った講演の冒頭部分である。そこには本論の目的である夏目の病歴の中心をなす消化器病に関する論及がある。

長与は、解剖が遺族の特志により行われることになったことを紹介した後に次のように述べている。「コノ解剖ノ目的ハ、夏目サンノ脳ヲ研究スルコトト、モウツハ先生ノ最モ悩マサレテ、ソウシテ同時ニ死ノ原因ニナッタコロノ先生ノ消化器系統ヲ調べルノニアッタノデアリマシタカラ、シタガッテ解剖ハ脳ト腹部ダケニ限ラレマシテ、胸部ソノ他ノ所ヘハ及バナカッタノデアリマス⁵⁾。」この後、夏目の脳についての所見が紹介され、病歴、臨床的症状と解剖的所見との関係という順に講演の内容を展開している。本論にとって重要なのは、消化器系統と長与の言う腹部に関するものである。注目点をそこに絞ると、次の箇所が目止まる。「三十七、八年ゴロカラヨホド胃ガ悪クオラレマシタヨウデアリマス、ソレハ塩酸過多症デアッタ、四十三年ノ六月ニ杉本君（注、長与胃腸病院医師）ノ診療ヲ受ケテオラレマス、中略、ソノ時ハ胃酸過多症デ同時ニ胃潰瘍ノ疑イガアッタ⁶⁾。」これにより、夏目のいわゆる胃病

もりした やすみつ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南20-10-3 広島文化学園大学大学院看護学研究科

の症状が顕著になったのは明治三十七年、八年(1904, 5年) ごろからであり、更にそれが胃潰瘍と疑われる段階に至ったのは、それから約5年を経た時点であると考えられていることが分かる。

解剖の所見と長与氏が参照した資料とは別に、本論で試みるのは、夏目自身や家族を初めとする彼の周辺にあった者達による情報を加えた夏目の胃を中心とする消化器に関する病状とそれが彼の生活に及ぼした影響についての論述である。

■ 夏目の消化器系疾病の始まり

夏目の生涯において、消化器に関係する疾病が認められるのは、荒正人が大著『漱石研究年表』の明治十八年(1885年)の記事に、「推定」としながらも当時は塩原姓であった夏目が虫様突起炎を患い、実家である夏目家に戻っていた、との記述がある。しかし、夏目自身が記述したもの及び談話等によって傍証するものを示すことができない。しかし、長与の解剖所見の中に虫様突起の顕著な変形を指摘する箇所があり、その顕著な変形は「以前ニ虫様突起炎ヲヤツタ確証デアル⁷⁾」としているところから、虫様突起炎を患ったという事実が確認される。

次にあげられるのは、翌年の明治十九年(1886年)、腹膜炎に罹患し当時在学中であった第一高等中学校予科第二級から一級へ進級するための試験を受験できず留年するという事態が発生したことである。このことについては、後年に、夏目自身が『中学文芸』という雑誌記者の質問に答えた談話の中で明らかにしている。

夏目は言う、「僕は其時腹膜炎をやって遂々二級の学年試験を受けることが出来なかった。」しかし、夏目はこの留年をむしろ勉強態度に転機をもたらしたものとして回顧し、「僕の一身にとって此落第は非常に薬になった様に思われる⁸⁾。」と述べている。

この留年は結果的には彼のその後大きな影響を与えることになる。それは、留年した同級生に米山保三郎⁹⁾がおり、明治二十一年(1888年)7月に予科を卒業し、本科に進学する際に建築科を志望する夏目に米山が文学を専攻することを勧めたことで文学に志望変更をするという経緯にもあらわれている。米山が夏目に文学を専攻することを勧めた理由は、「文学になれば勉強次第で幾百年幾千年の後に伝える可き大作も出来るじゃないか¹⁰⁾」というものであった。さらに、本科一部(文科)に進学することになったことにより、生涯の友となる正岡子規¹¹⁾(本名常規)と同級になる。なお、この年1月28日に塩原家より夏目家に復籍している。

正岡との交友は、翌年の明治二十二年(1889年)1月に始まり、同年5月には、子規の詩文集『七草集¹²⁾』に対して夏目は漢文で批評し¹³⁾、9篇の七言絶句を添え、漱石の号¹⁴⁾を用いた。作家漱石の誕生である。このように腹膜炎による留年は意外な結果をもたらす。

夏目の胃病の始期について、その特定は難しい。明治二十年(1887年)に長兄(大助)、次兄(直則)を相次いで肺結核で失っており、自身も当然気にはしていたが、発病と診断されるのは明治二十七年(1894年)のことであった。しかも極めて初期での発見であったため、生活上に大きな影響はなかった。

その間に位置する時期、すなわち明治二十四年(1891年)7月9日付正岡子規宛の書簡に夏目は歌舞伎の観劇をした報告をする中で「持病の疝気急に胸先に込み上げてしくしく痛み出せし時は芝居所のさわぎにあらず腰に手を当て顔をしかめての大ふさははたの見る目も憐なり¹⁵⁾」と記している。ここにある疝気とは、辞書「広辞苑」によれば「漢方でいう大小腸、生殖器などの下腹部内臓が痛む病気¹⁶⁾」と説明されている。したがって胃は該当しないことになるが、小宮豊隆は、疝気を胃病と解釈してよい¹⁷⁾としている。

私信において、厳密に疝気という用語を用いたとは考え難いのと、前後の文脈から推しても胃病と考えるのは妥当な解釈であろう。加えて注目されるのは、疝気を「持病の疝気」と言っていることで、持病という以上、この時に始まったことではないことになり、いよいよ胃病の始期は特定し難い。

この書簡を正岡に送った時期の夏目は、帝国大学文科大学英文科の特待生として比較的平穏な学究生活の中にあつた。この後、明治二十六年(1893年)帝国大学文科大学英文科を卒業した夏目は引きつづき大学院に進学し、大学院に在籍のまま、東京高等師範学校に英語教師として就職する¹⁸⁾。この学校に在

職中、先にあげたように肺結核の診断を受けた。しかし、結核菌は検出されなかった¹⁹⁾ため、休職することもなかった。そして、明治二十八年(1895年)に同校を辞し、愛媛県尋常中学校の嘱託教員となる²⁰⁾。同校勤務中は、彼自身に特筆すべき健康上の問題はなかったが、8月27日より正岡子規が同居し、正岡の去る10月中旬まで俳句に親しむなどして過ごす。この時期の正岡はすでに肺結核を発病しており、来訪前の5月22日には激しく咯血し、県立神戸病院に入院し、一時危篤に陥っている。そのような健康状態を知りつつ、夏目は正岡の同居を許したのである。幸い夏目の健康に格別の異常は起こらず、持病の胃病もそれを彼が外に対して訴えるほどの症状を示さなかった。

この年12月に上京した夏目は中根重一²¹⁾(注、貴族院書記官長)の長女鏡子と見合いし、婚約する。翌年4月、愛媛県尋常中学校を依願退職し、同月に第五高等学校講師に就任(7月には教授に昇任)する。6月9日、キヨ(戸籍名)との結婚式を挙げる。キヨ(通称鏡子以下鏡子)との新婚生活を始めるにあたって、夏目は「俺は学者で勉強しなければならないのだから、おまえなんかにかまってはられない。それは承知してもらいたい²²⁾」と宣告したという。この新婚時代の夏目に関する思い出の中で鏡子は、「食べ物のお話で思い出しましたが、後に長く胃をわずらって、とうとう胃で命を取られた夏日も、そのころはまだなかなかの大喰べで(夏になると少し胃が弱る様子ではありましたが)、どちらかと言えばこってりした脂っこい肉類のようなものが好きで、魚は臭いといってあまり好みませんでした²³⁾」と回想している。

鏡子の回想にあるように、この時期の夏目は胃病によって苦しむ様子をほとんど見せていない。本人が訴えなくても共に生活する妻の目に顕著な症状が見えなかったということがこのばあい重要な意味を持つであろう。

明治三十年(1897年)7月、夏目は鏡子を伴い上京し、6月に死去した実父直克の霊を弔うとともに、病床の正岡を見舞う。この上京後、鏡子は流産し、8月初旬から約一カ月、鎌倉材木座の大木喬任の別荘を借り静養する。9月初め、夏目のみ熊本へ帰る。

翌明治三十一年(1898年)6月末か7月初め鏡子は自宅近くを流れる白川の井川淵に投身自殺を企てる。原因は不明であるが、夏目にとっては衝撃的な事件であった。同年9月には鏡子の悪阻が重く、これに伴うヒステリーは11月まで続く²⁴⁾。ここに見られるように、結婚後の3年間は、健康面においては夏目よりもむしろ妻の鏡子の方に多くの問題が発生した。このことは、夏目の健康に何の影響も与えなかったとは考え難いが、とくに夏目自身が不調を強く訴えることをしていないのは事実である。

明治三十二年(1899年)5月31日、長女筆誕生。夏目はこのことを殊の外喜び、「安々と海鼠(なまこ)の如き子を生めり²⁵⁾」と詠む。一方、暫く発症しなかった胃病が起こるが8月から9月上旬にかけていくらか快方に向かう²⁶⁾。職場の第五高等学校では職務に精励し、6月21日付で第五高等学校大学予科英語科主任に命ぜられる。他に、第五高等学校の俳句同好会紫溟吟社の盟主として活動するなどして余裕を感じさせる側面も見せており、この年の暮12月11日、『ホトトギス』主宰の高浜虚子に宛てて、九州日々新聞に掲載のための投稿依頼の手紙を出している²⁷⁾。

明治三十三年(1900年)2月12日、中川元校長は英語研究を目的とする夏目の留学について文部省に上申のため上京する。その後、4月24日付で教頭心得となる。但し、それは5月12日までであり、同日の5月12日、英語研究のため、文部省第一回給費留学生として満二ヶ年イギリス留学を命じられる。現職のまま年額1800円の留学費が支給されることになる。

9月8日、夏目の乗船するプロイセン号(総トン数3278トン)は、横浜港を8時に出港する。出港の日から夏目が記している日記によれば、9日に早くも体調を崩し、下痢をするの記事が見える²⁸⁾。夏目が船旅にやっと慣れて来て体調も安定する徴候を見せるのは9月18日で、「腸胃少シク旧ニ復ス²⁹⁾」と日記に記している。しかし、それも長くは続かず、24日には、「胃悪ク腹下リテ心地悪シ³⁰⁾」と記す。

9月8日に横浜港を出港して目的地のロンドンに到着する10月28日迄の約50日の間、わずかに1日(10月21日)だけの空白を除いて、夏目は日記を書いている。その中には、晴、涼、雨などのように一文字しか記されていない日もあるが、陸路を含めた夏目の海外初渡航は興味深いものであったに違いない。しかし、体調は順調とは言えず船酔いを含めた彼の胃の不調は継続的なものであった。医師の診察を受けたことを示す記事のないことから推して、深刻な事態には至らなかったと見える。それでも、船酔い

から来る不快は、当初かなり激しいものであったことは9月12日（出港から5日目）の日記に記した「真に平気ナノハ芳賀位³¹ ノモノデ他ハ皆左程平気デモナイノデ[ア]ル其内デ尤モ平気ナラヌノハ小生デア³²」との記述によっても知られる。

■ ロンドン滞在中の日記および書簡に見る体調

ロンドン滞在中における夏目の胃を中心とする体調についての情報は彼自身が記した日記が基本資料となる。しかし、ロンドンに到着した明治三十三年(1900年)10月28日から約二年経過した明治三十五年(1902年)12月5日にロンドンのアルバート埠頭から日本郵船の博多丸(3817トン)に乗船しロンドンを去るまでに記された日記に限って見るならば、その量は決して多くない。とくに、明治三十四年(1901年)11月14日以降は全く残されていない。

夏目の残した日記の量が少ないことについて小宮豊隆は、「漱石は平生あまり日記を丹念につけようとはしなかった。つけてもそれは、『世間に出されない自己の面目を暗室内に發揮する』ための日記ではなく、むしろ自分の見聞を記録して、後日の用に備える為の日記だったように思う³³」と解説している。

ロンドン到着後の夏目の日記で健康状態に関する記述といえるものは明治三十四年(1901年)1月24日のものが初出で、「終日散歩セヌト腹エ合ガ悪イ³⁴。」が認められる。さらに、2月6日には「今朝少々咽喉ワルシ」と記す。そして、3月3日には、「Brixton ヲ散歩ス Carls-bnd ノ精ニテ下痢ス³⁵」と記している。ここに見られるような簡単な記述が3カ月の中で3回記されているに過ぎない。しかも、この年に記された日記で健康状態に関する記事としては3回分ですべてということである。このことから、この時期における彼の健康状態が良好であったと断ずることはできないが、とくに不調であったといえるものはない。

日記の他に夏目自身が認めたものとしては書簡がある。

まず、横浜を発って十日余り経た9月19日付で香港より高浜清（俳号虚子）へ宛てたはがきには、「航海は無事に此處まで参候えども下痢と船酔にて大閉口に候³⁶。」とあり、9月12日に日記に記されている船酔いに関する記事と重なる。これにより船酔いとそれに伴う下痢に閉口していることは認められても胃の不調を中心とする訴えではない。同年に認められた書簡としては、12月26日付で妻の鏡子宛に送られた長文の手紙の中に「当地にては金のないのと病気になるのが一番心細く候。病気は帰朝迄は謝絶する積なれど金のなきには閉口致候³⁷」と記しているのが注目される程度である。内容の通りであるとすれば、これは健康状態の不調を訴えるものではない。これ以外には、年内に送られた書簡に健康に触れる記述は認められない。

翌年になると、1月22日付で妻の鏡子に宛てて送った長文の手紙に、「幸い着以後一回も風をひかず何より難有候。近頃少々腹工合あしく候えども是とても別段の事には無之どうか留学中には病気にかかるまじくと祈願致居候³⁸」と記している。夏目は明らかに腹工合が良くないという表現で胃の不調を訴えてはいるが、それを病気としてとらえていないところがあり、そこに病気についての認識における夏目の特異性がある。

夏目が妻に宛てた手紙を送った数日後の1月26日に次女恒子が誕生する。しかし、その報告は直後になされなかった。次女の誕生を知らない夏目は、3月9日付で妻に宛てて手紙を送っており、その中に「御前は産をしたのか子供は男か女か両方共丈夫なのかどうもさっぱり分らん遠国に居ると中々心配なものだ³⁹」と記し、心配と苛立ちを露骨に訴えている。わが子の誕生を1月半も知らされない夏目の心境は容易に理解できる。このことは象徴的な意味を持っており、留守宅のことを気かけながら、自己の近況を伝える長文の手紙を認める夏目はこの後も幾度か同様の心境を経験することになる。腹工合の悪いのも病気として扱わず気軽に書き送っているのも、遠国の日本で留守を守る妻を心配させないための夏目流の配慮であったと見るならば、夏目の心境としてはやり切れないものがあったと推察される。

このように、明治34年前半での夏目には、健康面においては、胃に限って見る限り懸念すべき事態や症状は認められない。この時期、夏目が比較的平穏な日常を送り得た遠因に、池田菊苗との交流があったことがあげられよう。夏目はドイツに留学中の池田菊苗と意気投合し、5月5日より6月26日までの

52日間同宿する。池田の専門は物理化学であり、夏目の専門とは全く異なる自然科学者であるが3歳年長の池田を敬服⁴⁰⁾し、様々な話題について意見交換をしている。5月15日の日記には、「池田氏と世界観ノ話、禅学ノ話杯ス氏ヨリ哲学上ノ話ヲ聞ク⁴¹⁾」と記し、また翌日の日記には、「夜池田氏ト教育上ノ談話ヲナス支那文学ニ就テ話ス⁴²⁾」と記していることにも見られるように連日のように広範囲にわたる話題について意見交換をしている。このことが孤独感を深めつつあった夏目にとってどれ程の精神的慰安になり、また、刺激になったか測り知れないものがある。

この後、胃の具合に関する内容のものとしては、9月22日付の妻鏡子宛の手紙に、「近頃少々胃弱の気味に候胃は日本に居る時分より余りよろしからず当地にて重に肉食を致す故猶閉口致候⁴³⁾」と記し、1月22日付の手紙に比べると、不調を訴える意志が明確である。しかも、胃の不調は「日本に居る時分より余りよろしからず」とあることによって事態が進行していることをうかがわせる。

次に、精神面の状況がどのようなものであったかを見たい。胃の不調が進行する一方で、それと密接な関係を持つと考えられる精神面の状況を知ることも必要だからである。

まず、6月19日、夏目は文部省から、学術研究の旅行報告を確かにするよう督促を受けている⁴⁴⁾。文部省第一回給費留学生として選ばれ、年額1800円の留学費の支給を受けている者として、学術研究の報告をするのは当然果たすべき義務である。それを怠っていたため督促されたわけであるが、こういう事態は、格別に義務観念の強い夏目には、本来起こり得ないことであるにもかかわらず起こっている。理由は何に求められるであろうか。その理由を暗示するものが次の日記である。

7月1日の日記に夏目は、「近頃非常ニ不愉快ナリクダラス事ガ気ニカカル神経病カト怪マル⁴⁵⁾」と記していることによっても知られるとおり、ここでは明らかに自身の神経の異常を気にかけている。文部省からの督促状といい、この日記の内容といい、そこにはある共通なもの、それを異常というのが不適切であるならば、神経の過敏な状況というものが作用していると考えられる。

そのことを指摘するに際しても念頭に浮かぶのは池田菊苗との交流の意義である。この日記を記す約一週間前に夏目は池田と別かれている。52日間を共にした敬愛する友が帰国の途についた8月30日、別れを惜しみ、わざわざアルバート埠頭に出掛け見送ったのである。

自身の肉体、精神面の不安を抱え始めた夏目は、第五高等学校での教え子であった寺田寅彦の健康を気遣い、11月20日付の手紙に「今十一月二十日君の手紙を拝見、何か肺尖カタルとかで御上京にならぬ由コイツは少々厄介の事と遠方から御心配申上る⁴⁶⁾。」と書き送っている。文面にあるとおり、寺田からの手紙を11月20日に受け取り、その日に返事を書いている。寺田に限らず夏目は自身が手紙を書き送ることを好んだ分、手紙を受け取ると律気に返事を書くのが通常であった。

しかし、受け取ったその日に返信を書くことを習慣としたわけでないので、このばあい11月20日という日付の傍に・印を付けたのは、受け取ったその日に書いたことを強調した夏目の一種の戯れであろう。

この年最後の手紙を夏目は正岡子規に宛てて12月18日に、下谷区（東京）上根岸の自宅で病床に苦しむ彼への見舞文と同時にロンドン便りともいえるべき近状報告の長文の手紙を書き送っている。そして、これが夏目の大学予備門時代以来の親友正岡子規への最後の手紙になる。内容は感傷性を一切排除したもので、ハイド・パークで大道演説を聴いたこと、セント・ジェームズ・ホールで日本の柔術使（注、柔道家）と西洋の相撲取（注、レスラー）の250円懸賞金付きの勝負を見物したことなど、病床にある正岡を楽しませることを強く意識したと思わせるものが多い。

以上にあげた寺田宛の手紙、正岡宛の手紙の双方に見られるのは夏目の親しき他者へ向けられる思慮深い温情である。肉体面、精神面の両面において決して安穏な状態ではなかった夏目であることを思量すると、夏目の内面の複雑さを暗示するものようである。

明治三十五年(1902年)はロンドン滞在最後の年であり、留学の成果をあげるべく研究と思索に没頭した時期でもあった。そのため、課題の消化に費やすエネルギーは、そのまま彼の身心への過大な負担をかけることになったであろうことが推察される。そのためか前年の11月13日までは記した日記もそれ以降は一日もつけていない。つまり、明治三十五年には一行の日記も書いていないのである。そればかりではない。手紙も1月は全く書かず、2月、3月、4月、5月はそれぞれ数通を数えるだけしか出していない。6月は零、7月が一通、8月は零、9月が一通、10月が一通、11月は零、12月が一通という数

字に見られるように、生涯を通して見ても目立って少ないことが特徴的である。日記は先に小宮の指摘を引用したように夏目は習慣的につけることをしなかったのに対し、手紙は自からも言明したように好んで書いた。にもかかわらず極端に凝縮された生活から来る孤独から彼を解放してくれるはずの手紙も書かなくなっている。そこには彼の内面に何かが起きていることを想像させる。

実際それは現実となってあらわれる。帰国をあと3ヶ月後に控えた9月12日、夏目は妻鏡子に宛てた手紙の中で、「近頃は神経衰弱にて気分勝れず甚だ困り居候。然し大したる事は無之候えば御安神可被下候⁴⁷⁾」と精神状態に伴う不安を訴えている。この手紙を送った時点から約10日後の10月10日頃、夏目と共にプロイセン号に乗船し留学の途についた一行の一人である藤代禎輔は、文部省から、岡倉由三郎を通して「夏目精神に異状あり、藤代へ保護帰朝すべき旨伝達すべし」との電報による依頼を受けるという事態が発生した⁴⁸⁾。

しかし、文部省の依頼は直ちに実行されることはなく、夏目は、12月5日、藤代禎輔より2便遅れて、日本郵船の博多丸に乗船し、ロンドンを発つ。船はジブラルタル海峡、スエズ運河、インド洋を経て明治三十六年(1903年)1月20日に長崎港入港、そして、1月23日、神戸に上陸する。この間、夏目の精神状態は一時回復していたが船中で少々悪くなつたらしい、とは妻鏡子の談話である⁴⁹⁾。1月24日、国府津で鏡子とその父中根重一の出迎えを受ける。新橋に到着時には家族、親戚の他に医者数人がいた⁵⁰⁾。夏目の精神状態についての情報により帰国する夏目を医者を伴い出迎えるところに当時の夏目が置かれていた状況が推測される。

■ 帰朝後における夏目の健康・生活状況

帰国した夏目は一旦妻の実家中根重一方に落ち着き、その後、3月3日に本郷区千駄木町（現文京区向丘）に転居する。帰国早々の中根方での夏目の行動に異常が認められたことを妻鏡子は回想の中で語っている。そこには長女筆子に対する理由なき暴力がその典型として語られている⁵¹⁾。

夏目の不調は精神面に限られたものではなく、胃の不調としてもあらわれて来る。3月上旬に転居した後、胃酸過多で苦しんだことが伝えられている⁵²⁾。このことについては、日記、手紙等による確認ができないが、精神面の不調については夏目自身による手紙の存在によって確認できる。それは3月9日、夏目が菅虎雄へ宛てた手紙によってである。第五高等学校辞職の手續書類の一つに医師の診断書が必要であることから、その診断書の作成を知り合いの医師に依頼してほしいとする文面のものである。すなわち「大兄より呉秀三君に小生が神経衰弱なる旨の診断書を書いて呉れる様依頼して被下間鋪候や⁵³⁾」というのがそれである。簡単には進捗しなかったが、ついに3月31日、第五高等学校教授依願免本官の辞令を受ける⁵⁴⁾。夏目は留学中から帰国後第五高等学校に復籍することを希望せず、東京で勤務できる学校を友人を通じてさがしていたので希望が叶えられたことになる。

4月10日、第一高等学校英語嘱託の辞令を受ける。1週20時間、年俸700円。4月15日、東京帝国大学文科大学講師嘱託の辞令を受ける。年俸は800円で、1週6時間。

夏目が東京帝国大学で初めて教壇に立ったのは4月20日である。当時学生として講義を受講した松浦一は「先生が初めて教室へ現れた時、きびきびとした而して瀟洒な洋服姿に蝙蝠傘を持って来られたと覚えている⁵⁵⁾」とその外見と態度の印象を語っている。そして、授業を受けている間に得た印象として、「先生には何だか面白い非凡なものがあるということを漠然と知った⁵⁶⁾」とも述べている。

第一高等学校で初めて教壇に立ったのは5月13日であった。当時、一年次に在籍していた野上豊一郎は、「教え方はどこまでも厳正で、少しもゴマカシがきかず、私共には実に厄介な英語であった⁵⁷⁾。」と回想している。また、下読みをして来るのは学生の義務であると考えた夏目の授業を下読みもせず受講し、訳読を指名すると「やって来ません」と答え、夏目に「此次やって来い」と命じられながら次回もやって来なかった学生藤村操に対して、「勉強する気がないなら、もう此教室へ出て来なくてもよい」と厳しく叱正したところその数日後に藤村は日光の華厳の滝で投身自殺するという事件についても語っている⁵⁸⁾。自殺が確認されたのは5月22日であったから、夏目が授業を始めてからわずか半月後に起きたことになる。当然のことながら夏目は衝撃を受ける。しかもそれがすぐに解消されるような程度の衝撃でなかつ

たことは、その後に発表された『吾輩は猫である』⁵⁹⁾（第十）、『文学論』⁶⁰⁾（第二編第三章）などにその事に触れる記述があることによってもそれは明らかである。

ここに見て来たのは、帰朝後における職場での夏目の姿であるが、2年間に及ぶ留学中のロンドンにおいて彼が肉体面においても精神面においても重い課題を蓄積し帰国したことは、それ以後の彼の思想や生活に種々な形をとって反映して行くことになる。

■ 結 言

本論によって明らかにし得たことは次の点である。まず、夏目の病歴の中で消化器系のそれは青年期の虫様突起炎から始まり、次いで腹膜炎、そして胃炎へと経過をたどり、なお進行していたこと。

次に一時期肺結核に感染し発病したが、彼の生活上に深刻な結果をもたらさなかったこと。

そして、それらと時には平行して夏日本人によれば神経衰弱といわれる神経系の病気を経験したことがあげられる。そのいずれも彼の生活に影響を及ぼすことになるが、神経系の病気を除けば、彼自身の生活とその周辺への影響は、この時期に限っていえば顕著な影響をもたらすというようには作用しなかったことも明らかになった。

ただし、神経系の病気については、彼自身を苦しめ、同時に周辺にとっても問題を発生させたことが明らかになった。以上が本論によって明らかにできたことであるが、消化器系にしても神経系にしても病気が本格化するのはいずれのことなので、それについては次回以後の論考を期したい。

注

- 1) 真鍋嘉一郎（1878-1941）は夏目の松山中学校時代の教え子。1916年夏目の主治医となる。別冊国文学 No.39 P.265の相原和邦の記事参照。
- 2) 荒正人、夏目漱石、五月書房、（1957）P.7によれば、夏目は五男末子で直矩は三男。
- 3) 小宮豊隆（1884-1966）はドイツ文学者で東北大学名誉教授。漱石研究の第一人者で『夏目漱石』は古典的文献。
- 4) 長与又郎（1878-1941）は、医学者、病理学者で後に東大総長になる。長与弥吉（長与病院長）の弟。
- 5) 夏目鏡子述、松岡譲筆録、漱石の思い出、文春文庫、（1994）P.413。
- 6) 同前書、P.415。
- 7) 同前書、P.421。
- 8) 夏目漱石、漱石全集第三十四卷所収、岩波書店、（1980）P.73。
- 9) 別冊太陽漱石、平凡社、1980年、P.49に夏目と並ぶ記念写真入りで紹介されている。
- 10) 夏目漱石、漱石全集第三十四卷（前掲）所収、P.74。
- 11) 正岡子規（本名常規）（1867-1902）は、夏目の生涯に亘る親友。とくに俳句については夏目の指導的立場にあった。
- 12) 小宮によれば、明治二十一年夏から翌年5月までかけて完成させた正岡子規の詩文集。題名は秋の七草によって名づけた。漱石全集、第二十二巻、P.323による。
- 13) 夏目漱石、七草集評、漱石全集第二十三巻所収、岩波書店、（1979）P.23～24。
- 14) 半藤末利子、漱石の長襦袢、文芸春秋、（2009）P.156に、『蒙求』にある「漱石枕流」という故事から筆名をとったことが紹介されている。
- 15) 夏目漱石、書簡、漱石全集第二十七巻所収、岩波書店、（1980）P.23。
- 16) 新村出編、広辞苑第二版増訂版、岩波書店、（1979）P.1260。
- 17) 小宮豊隆、夏目漱石、岩波書店、（1959）P.662～663。
- 18) 荒正人、夏目漱石、（前掲書）、P.20によれば、年俸450円、月給37円50銭であった。
- 19) 荒正人、増補改訂漱石年表、集英社、（1984）P.153。
- 20) 稲垣達郎、漱石の人と文学—夏目漱石小照—ほるぷ出版、（1976）P.20によれば、月給80円は校長60

円に比して破格であったことと都落ちの関係を推測している。

- 21) 荒正人漱石研究年表（前掲書），P.175によれば，中根重一は福山藩の貢進生として大学南校に学び，ドイツ語を得意とする学者的官吏であった。
- 22) 夏目鏡子述松岡讓筆録（前掲書），P.34.
- 23) 同前書。P.44.
- 24) 荒正人。漱石研究の年表（前掲書），P.212～213.
- 25) 夏目漱石，俳句，漱石全集第二十三卷（前掲書）所収，P.162.
- 26) 荒正人，漱石研究年表（前掲書），P.222.
- 27) 夏目漱石，書簡，漱石全集第二十七卷（前掲書）所収，P.115.
- 28) 夏目漱石，日記，漱石全集第二十四卷所収，岩波書店，P.5.
- 29) 夏目漱石，同前書，P.7.
- 30) 同前書，P.8.
- 31) 荒正人，漱石研究年表によれば，船内では隣室の102号室に藤代禎輔，稲垣乙丙と共に乗船し，夏目の動きをよく知る人物。P.234に記述あり。
- 32) 夏目漱石，日記，漱石全集第二十四卷（前掲書）所収，P.5.
- 33) 小宮豊隆，解説，漱石全集第二十四卷（同前書）所収，P.234.
- 34) 夏目漱石，日記，漱石全集第二十四卷（同前書）所収，P.28.
- 35) 同前書，P.36.
- 36) 夏目漱石，書簡，漱石全集第二十七卷（前掲書）所収，P.122.
- 37) 同前書，P.130.
- 38) 同前書，P.134.
- 39) 同前書，P.149.
- 40) 小宮豊隆，解説，漱石全集第十八卷所収，岩波書店，（1979）P.418～419.に夏目が池田に敬服したようすが紹介されている。
- 41) 夏目漱石，日記，漱石全集第二十四卷（前掲書）所収，P.50.
- 42) 同前書，P.50.
- 43) 夏目漱石，書簡，漱石全集第二十七卷（前掲書）所収，P.157.
- 44) 夏目漱石，日記，漱石全集第二十四卷（前掲書）所収，P.54.
- 45) 同前書，P.55.
- 46) 夏目漱石，書簡，漱石全集第二十七卷（前掲書）所収，P.160.
- 47) 同前書，P.175.
- 48) 荒正人，漱石研究年表（前掲書），P.320.
- 49) 同前書，P.323.
- 50) 同前書，P.326.
- 51) 夏目鏡子述，松岡讓筆録（前掲書），漱石の思い出，P.120.
- 52) 荒正人，漱石研究年表，（前掲書），P.328.
- 53) 夏目漱石，書簡，漱石全集第二十七卷（前掲書）所収，P.181.
- 54) 松岡讓，漱石・人とその文学，潮文閣，（1942），P.162.
- 55) 松浦一，大学教授時代，夏目漱石研究資料集成第3巻所収，（1991），P.39.
- 56) 同前書，P.40.
- 57) 野上白川（本名豊一郎），大学教授時代，夏目漱石研究資料集成第3巻（前掲書）所収，P.43.
- 58) 同前書，P.43～44.
- 59) 夏目漱石，吾輩は猫である。漱石全集第2巻所収，岩波書店，（1978），P.162.
- 60) 夏目漱石，文学論，漱石全集第十八巻所収，岩波書店，（1979），P.132.

追記 引用文中の旧漢字旧仮名づかいはすべて新漢字，新仮名づかいに改めたことをことわっておきたい。